ものです。考えてみると、霞ケ浦の地元にある茨城大学が霞ケ浦がここまで追いこまれるのを座視していたことも知事と同罪のように思えてくるのです。霞ケ浦を滅亡させないように流域に住む住民は今こそ立ち上がるべきでしょう。霞ケ浦をここまで追いこんだ者こそ滅亡の淵に追い落すべく。

（この原稿は八月二十九日付茨大農職新聞に掲載されたものを著者の同意を得て転載いたしました。）

秋の末の霞に立てる筑波根の
安らかにして人しのばしむ

小暮政治

公魚を焼くころ

瀬古沢登み

凍つた湖のかけらの様な、白銀の公魚が土間に溢れる。
公魚を刺す女達の、絶間ないおしゃべりに古枯らしが舞う。
お母さん、あなたは真夜中の二時三時まで、
公魚を焼いていましたね。
炭火が真赤に燃えて、あなたのほつれ毛に、襟に肩に灰が雪の様に散っていましたっけ。
シンデレラの童話を胸に、コタツで眠ってしまった幼い私。
故郷の街角に、公魚を焼くこうばしい香が流れ、湖は西風が荒れているでしょうね。
お母さん。